

上田貞次郎全集

第三卷 産業革命

英国産業革命史論

産業革命史研究

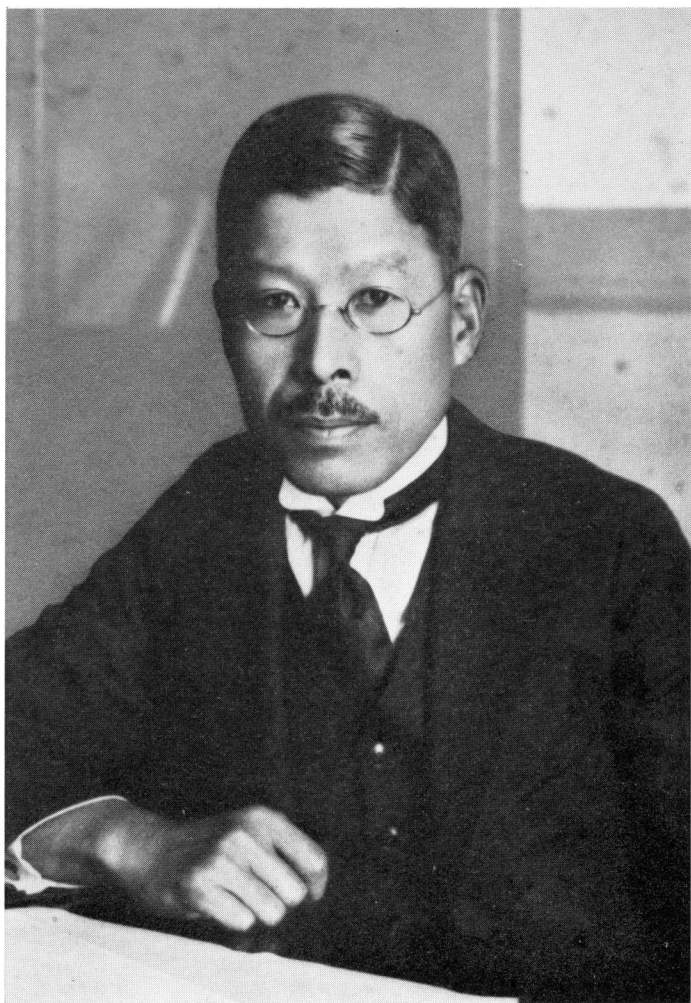
近世商業史教科書

明治經濟史の研究

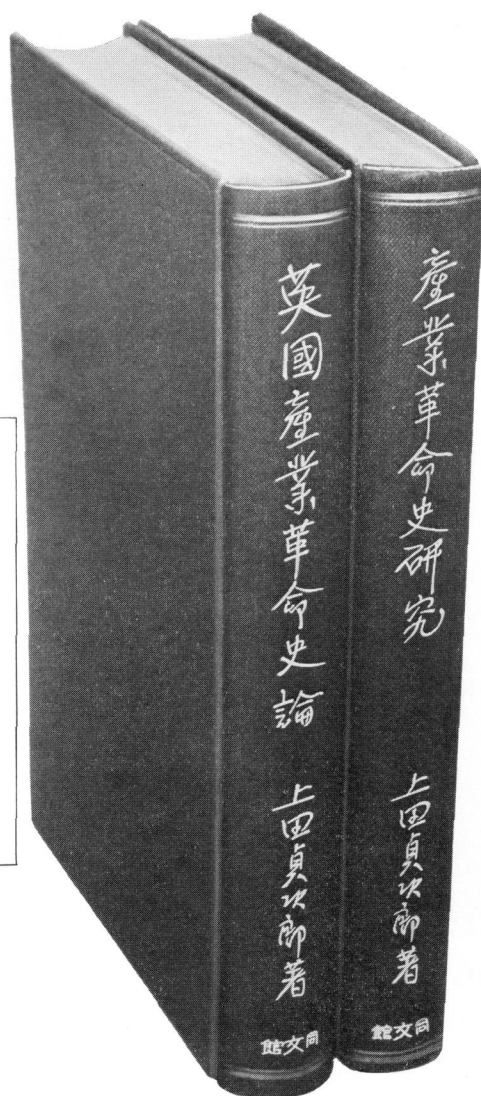
その他



贈寄氏 所行 発行



大 正 11 年 当 時



法學博士上田貞次郎著

英國産業革命史論

東京株式同文館藏版

法學博士上田貞次郎著

産業革命史研究

東京株式同文館藏版

『英国産業革命史論』（大正12年）、『産業革命史研究』（大正13年）と本扉

凡 例

一、第一部「英国産業革命史論」は大正十三年同文館本に従う。*印の脚註は言葉の説明は本文に続け、引用文献は註記の形式をとって各章末に列記した。

二、第二部「産業革命史研究」は昭和五年の改造社版に拠った。同文館本に対し若干の追記訂正が上田先生によりなされているからである。また「第六章、第十九世紀中葉の英国労働組合」と「第七章、二十世紀初頭の英国労働組合立法」が新しく追加せられた。年表についても*印の脚註があるが言葉の説明は本文に続け、引用文献は註記の形式をとって末文に列記した。

英国産業革命史論参考書は大正十二年の震火災によって焼失した上田先生研究室の書棚にあったものを上田先生の指図により編者が整理したものである。この参考書が改造社本に転載されるに当り、一九二九年出版までの新しい文献が先生により追加されている。

三、第三部「近世商業史教科書」(日本の部)は「改訂近世商業史教科書」(日本の部)昭和八年十一月修正再版、三省堂発行によった。

「近世商業史教科書」(外国の部)は「改訂近世商業史教科書」(外国の部)昭和八年十一月修正再版、三省堂発行によった。

両書共に豊富にして美麗な図画、写真、地図、年表等を附載するが本全集にてはその全部を割愛した。「日本の

部」の図画は当時東京商科大学の学生であった編者が、上田先生の依頼で図書館を探索して得たる貴重なる資料の若干もあるという個人的感慨もあるが、今回は涙を吞んで全部割愛した。

尚両書とも昭和八年版には（外国の部）の「緒言、上古及中世と近世との関係」以外には緒言を付していないが、こゝには旧版の緒言を特に附加して教科書の趣旨を知るに便した。

四、第三巻の編集は猪谷善一が担当、校正は山田準君を煩した。記して感謝する。

（猪谷善一 記）

目 次

凡 例

第一部 英國產業革命史論

序	文 (大正十二年版・昭和五年版)	一一
第一章	產業革命	一五
第二章	自由主義	二六
第三章	勞働生活	三五
第四章	階級鬭爭	四七
第五章	温情と自主	五六
第六章	組合精神	六六
第七章	社會主義	七八
第八章	産業管理	八七
第九章	企業と勞働	九六
附 錄	英國産業革命史論年表	一〇九
	英國産業革命史論參考書	一一七

第二部 産業革命史研究

序 文 一三一

第一章 階級闘争としてのチャーティズム 一三三

一問題の意義及研究資料（二三三） ニチャーティストの政治的主張（一三九） 三チャーティズムの經濟的背景（一四五） 四チャーティスト運動の經過（一五〇） 五チャーティズム衰亡の原因（一六八）

第二章 フランシス・ブレース傳 一七八

一本書の材料（二七八） 二生涯の概略（二七九） 三青春時代（一八三） 四學說（一八四） 五事業（一八七） 六餘録（一九七）

第三章 シャフツベリー伯の生涯 二〇一

第四章 ロバート・オーウェン 二一五

第五章 カーライル及ミルの産業論 二四〇

第六章 第十九世紀中葉の英國勞働組合 二五二

緒言（二五二） 一新精神と新形態（二五五） 二合同機械工組合（二五九） 三新組合運動の首脳（二六四） 四勞働組合法の通過（二六九） 五木綿工業及び石炭坑に關する立法（二七四） 六罷業と和解（二七七） 七自由放任主義の衰頹（二八一） 八自由主義と勞働組合（二八八）

第七章 二十世紀初頭の英國勞働組合法 二九一

第三部 近世商業史教科書

日本の部

緒言……………

参考書目……………

第一期 徳川時代……………

第一章 時勢の概略……………

第二章 徳川氏初期の外交及び鎖國令……………

第三章 貨幣及び度量衡……………

第四章 内地交通の發達……………

第五章 沿岸航海の發達……………

第六章 諸國物産の發達……………

第七章 都會の繁榮……………

第八章 商工業の狀態……………

第九章 商工業の團體……………

第十章 外國貿易及び通商條約……………

三〇七

三〇九

三一

三一

三一四

三二六

三二八

三三一

三三二

三三四

三三七

三三一

三三三

第二期	明治維新以後の時代	三三六
第一章	時勢の概略	三三六
第二章	財政	三四〇
第三章	貨幣	三四二
第四章	銀行	三四四
第五章	鐵道	三四六
第六章	海運	三四八
第七章	工業	三五二
第八章	會社及び組合	三五四
第九章	外國貿易	三五七
第十章	勞働問題	三六一
第十一章	最近の經濟事情	三六三

外國の部

緒言 (初版・改版)	三六七
參考書目	三七一

緒 言	上古及び中世と近世との關係	三七三
近世第一期	宗教改革及び航路發見から産業革命に至る時代	三七九
第一章	時 勢 の 概 略	三七九
	一 宗教改革及び三十年戦争 (三七九) 二 諸王國の勃興 (三八〇) 三 地理上の發見 (三八二)	
第二章	諸國民の商業的競争	三八四
	一 ポルトガルの東洋經略 (三八四) 二 イスパニアと新世界經略 (三八五) 三 オランダの海上權 (三八七) 四 フランスとコルベール主義 (三八九) 五 重商主義時代のイギリス (三九〇)	
近世第二期	フランス革命及び蒸汽機關發明以後の時代	三九四
第一章	時 勢 の 概 略	三九四
	一 自由民權の運動 (三九四) 二 國家統一の運動 (三九七) 三 歐米と東洋 (三九九)	
第二章	機械の發明及び海陸交通の進歩	四〇一
第三章	商工業の組織	四〇六
第四章	貨幣及び銀行	四〇八
第五章	植民及び貿易	四一一
第六章	恐 慌	四一六
第七章	勞働問題	四一八

第八章 世界大戦争	四二二
-----------	-----

第四部 經濟史、思想史、ブック・レビュー

明治經濟史の研究	四三一
明治十七年の産業政策	四四五
英國に於ける政治思潮の變遷	四六〇
ギルド社會主義の批評	四七六
ジョン・スチュアート・ミルと社會主義	四七八
英國に於ける炭坑國有運動の思想的背景	四八三
十九世紀英國産業史に關する近刊四種	四九四
英國産業史に關する近刊七種	五〇五
小泉信三氏著『近世社會思想史大要』	五一二

解 説

一流経済学者たるの要件は一身にして理論・政策・歴史に関する総合的独創的知識を所有することである。上田貞次郎先生はこの要件を備えた明治・大正・昭和を通じての数少ない経済学者の一人であった。

本巻は専らイギリス産業革命を中心とする先生の諸論稿を集録するものであり、いわば歴史家としての先生を浮彫するものである。

上田先生は明治三十五年六月に東京高等商業学校専攻部の業を終えるのであるが、卒業の直前、三十四年九月にドイツ留学より帰った福田徳三博士から先ず専攻部卒業論文の審査を受けてその絶大の讃辭を得、学校に残る推薦を受け、引続きドイツ歴史派経済学に固まっている福田博士から強い学問的影響を受けた。明治三十八年文部省より留学を命ぜられ渡欧することとなるのであるが十月二十二日船中で認めた『商業史教科書』（外国の部）の序文で「本書の全部に普遍せしめんとして著者の勉めたる所は著者が曾て法学博士福田徳三先生に依って鼓吹せられたる経済史学界最近の思潮なり」とあったのはその影響の一端を示すものである。

当時日本の留学生が草木の風になびくが如く出掛けた先はベルリンその他のドイツの大学であった。しかし先生は

郷土和歌山の先輩鎌田栄吉氏から忠告されてイギリスを留学先に選んだ。新設のバーミンガム大学にはハーバード大学の経済史教授から転じたW・J・アシュレーがあり、Business Policyを講義していた。当時先生は二十七才であり、アシュレー教授は四十五才という学者として伸び盛りであった。そのイギリス経済史に関する大著は一八八八年に出版され、論文集も一九〇〇年に刊行されていた(1)。ケンブリッジ大学に籠るカニンガム(2)と共に、イギリスに歴史派経済学を創立し、経済史研究の隆昌を導いたパイオニアの一人であった。

明治三十五年前後より歴史派経済学に親しみ、その研究方法に傾倒し、留学中の専攻科目として商業学を与えられた先生としてはアシュレー教授は願ってもない好適の指導教授であり、バーミンガム大学の研究室において六ヶ月の指導を受けるのである。外国留学生にあまり指導はアシュレーに見られず、厳しい評価が先生に与えられたことは『上田日記』の示す所である(3)。

先生の『英国産業革命史論』は「純潔なる人格と卓抜なる識見を抱きながら僅か三十一歳を以って長逝したオックスフォードの熱情的社会改革家アーノルド・トインビーは『英国に於ける第十八世紀の産業革命』と題する一書を遺した。」という名文を以て始まる。トインビーの著書は一八八一年十月から一八八二年五月に至る間オックスフォードの講義に利用されたトインビー自身のノートと、講義に出席したアシュレー等のノートを対照して一八八四年に出版されたものである(4)。

同書出版五年後にアシュレーはトインビーの評伝を書きその学問上特にイギリス経済学の一つの新しい創意ある発展の創始者としての功績をたたえた。アシュレーに従えば、第一、当時不振であったイギリスの経済学の研究に関しトインビーは新しい関心と新しい信念と新しい希望を喚起した。第二、トインビーは社会発展の歴史的研究の方向に向って、新しい興味を向けた。彼の全智全能は歴史に向けられ、社会的事実の具体的描写の表明に向った。第三、ト

インビーは近代社会主義に長所のある事を明白に認めたのであり、かつ国家機能を注意深く拡張することこそ革命の最も有効な防止手段であると見たイギリスの最初の専門的経済学者であった。この第二、第三点から、トインビーはドイツの歴史派経済学者特に講壇社会主義者に近いとアシュレーは断定するのである(5)。経済史研究の流れからいうとトインビー——アシュレー——上田先生と連る訳であって、先生の『英国産業革命史論』は偶然の学問的所産ではないのである(6)。

注

- (1) William James Ashley.
An introduction to English economic history and theory. Part I. The Middle ages. Part II. The end of the middle ages. 1888. 1893.
Surveys. Historic and Economic. 1900.
- (2) William Cunningham. The growth of English industry and commerce. 1882.
- (3) 『上田貞次郎日記(明治三十八年—大正七年)』(19)バーミンガム遊学所感、昭和三十九年、一〇九—一〇頁参照。
- (4) Arnold Toynbee. Lectures on the industrial revolution of the Eighteenth century in England. 1884. 私の手許にある邦訳だけでも三種類ある。
第一、芝野十郎訳『十八世紀英国産業革命史論』大正十四年。
第二、川喜田孝哉等訳『英国産業革命史』昭和十八年。
第三、塚谷晃弘、永田正臣訳『英国産業革命史』昭和二十六年。
- (5) William James Ashley. Arnold Toynbee. Political Science Quarterly, Sept. 1889. Surveys. Historic and Economic. Lond. 1900. Pp. 428-431 に収録された。
- (6) 上田先生の『英国産業革命史論』をよく読まずして、同書は「アーノルド・トインビーを祖述した」となす軽々の速

断者がある。穂積重行『産業革命』昭和三十六年参照。

二

上田先生の『英国産業革命史論』はいかにして産れたか。大正十一年十一月十日附の目白の自宅で書かれた序文がこれを一応明白にする。「一九一八年十一月歐洲大戦争の終了してから数ヶ月の間に我日本の思想界が非常の変動を爲したことは如何に健忘性な人でもよもや忘れはしまい。……一九二〇年の春、余は華府に於ける第一回国際労働會議から帰って以来、右の如き思想界の紛糾を眼前に見て深く考慮したが、終に英国産業革命及之に次いで起れる新実業階級及新労働階級の歴史を且研究し、且講義することを始めた。……余は決して英国の歴史的發達が必ず日本に於いて繰返さるべしと考へて居るのではないので、寧ろ読めば読む程、考へれば考へる程、国民性の相異の大なることを感ずるものである。唯史眼を以って見れば英国の産業革命史は今の日本の爲めに必ず何かの暗示を与へ得ることを確信して居る。」

先生は第一回のヨーロッパ滞在に際してイギリス北方工業地帯のバーミンガムを留学先に選んだ。旅行好きな先生のことであるから産業革命の關係工業や史跡をしばしば尋ねたことであろう。その手記のうちに一九〇七年、イギリス滞在中シドニー・ウェップの『労働組合史』を読んでフランシス・ブレースを知ったとあるから、当時狭い商業学から離れて広い社会科学的見地に立つて読書研究をされていたことを知るのである。

第二回の渡欧は大正二年からの一年であつて、旧和歌山藩の旧領主徳川頼倫侯の長子頼貞氏がイギリスに留学するに際し、先生の父上が嘗て旧藩主の家扶であつた關係もあつて同行監督を依頼されケンブリッジ大学に滞在した。キ

ングス・カレッジのフェローであったケインズと交友関係に入っただけの時でありスレーター、アシュレー、ハモンドなどの新著に接し、かつ初期ギルド・ソシアリズムをも研究している。しかし第一次大戦の勃発と財政学講座担当者たることを母校が指命し急遽帰朝を命じたのでシベリア鉄道経由で日本に帰った。

イギリスで見聞した戦時経済は大正四年に『戦時経済講話』として出版されたが、帰朝後の先生の学問的興味は一方においてギルド・ソシアリズムの研究や企業の社会化について向うと共に他方、イギリス産業革命の研究に向った。大正六年に一ツ橋に入学した私は編集部長と編集部委員という関係もあって先生に私淑しいろいろな私的雑用を仰せつかった。記憶にあるのは大正六年から二、三年間よく丸善に洋書を買に行かされたことである。以上二つのカテゴリーの書籍が多かった。また先生自身ロンドンのハーディングやミュージアム・ブック・ストア等に直接発注し当時において稀覯本であったイーデンの第一版(2)を入手されて満面笑を湛えて喜びを示されたことを六十余年後の今日私は想起するのである。しかし、是等の蔵書はすべて大正十二年の震災で一ツ橋の内田ホールの研究室で惜しくも焼失した。

東京高等商業学校は大正九年四月から昇格して東京商科大学となった。看板教授の一人である上田先生も張り切つて新学期から新しい講義を開講された。それがイギリス産業革命史論である。既に或る程度資料も集り、二回の滯英生活でイギリス産業革命は先生に最も適した、その人びたりの講義であったから講義の出来もよかった。先生の講義に迫力があつた。熱があつた。毎回資料を書き抜いたノートを手にして講義されるのであるが、ほとんどの資料は暗記されていた。暗夜に燈火を点する様な明快な講義であつた。大正九年、大正十年、大正十一年と三ヶ年に亘り一ツ橋で「英国産業革命史論」の講義は繰返された。大正十二年東京商科大学助手となった私は先生の抱持ちで大正十二年夏、北海道庁主催の夏期大学や小樽高等商業学校の講義にお伴したのであるが、先生は第一章より第九章の順を追

うて講義されるが必要に応じて適当に途中を省略し原稿一枚も持たないで緩急自在な名人芸の講演を展開された。

ノートから原稿用紙に清書し、年表、参考書目、索引作製、校正などを御手伝して本巻第一部の『英国産業革命史論』が上梓されたのは大正十二年一月であった。先生の語を借れば「昨春『英国産業革命史論』を著して江湖に薦めしに意外の好評を博したるは最も光榮とする所なり」(3)であった。『英国産業革命史論』は第二次大戦に際して幸い出版元の同文館において紙型が焼失を免れたので、私は同文館服部社長にその再版を勧めた。かくて出版されたのが十七版であるから初版以来数万部が売れた訳であって、かういう堅い研究書では異例の売行といわねばならない。

先生は『英国産業革命史論』出版と前後して五篇の研究論文を書かれた。「階級闘争としてのチャーティズム」は先生の努力を傾注された力作であり本全集全体を通じても出色の傑作と考えられる。その他フランシス・ブレース、シャフツベリー伯、ロバート・オーウェン、カーライル及びミルの研究は何れも『英国産業革命史論』において簡単に扱われ先生の意見が十二分に吐露されていない諸点につき先生が詳細に論述されたものであって、『英国産業革命史論』と『産業革命史研究』は姉妹篇の關係に立った。『産業革命史研究』の出版は大正十三年四月であった。本全集第三巻第二部に収録した『産業革命史研究』は凡例でも説明した如く昭和五年の改造社版によった。同文館本に対し若干の追加や訂正が先生自身の筆で為されているからである。また「第六章第十九世紀中葉の英国労働組合」と「第七章二十世紀初頭の英国労働組合立法」が新しく追加されたからでもある。

『英国産業革命史論』と『産業革命史研究』刊行後半世紀余が経過した。その間欧米学界においてはマントウ(4)、クラッパム(5)、アシュトン(6)等を始めとして多数のイギリス産業革命研究者が多数の労作を書上げた。

上田先生の門下生からも徳増栄太郎君がアシュレー、マントウを翻訳し(7)、北野大吉君はロバート・オーウェン、メリー・ウォルストンクラフトの研究から始めてイギリス自由貿易運動史の研究を大成した(8)。更にその研究は識

者により瞩目されていたが終戦後上海からの引揚げに発病し研究中道にして倒れてしまった。私も経済学説、社会思想と産業革命史の關係を検討して一書を成した⁽⁹⁾。山中篤太郎君は英国労働組合法の始終を研究した⁽¹⁰⁾。金子鷹之助君は先生の門下生であるがそのゼミナール出身の矢口孝次郎君は最近、イギリス産業革命史を意慾的に研究し、その近著は拔群の出来栄えである⁽¹¹⁾。一ツ橋関係者以外では数多いが小松芳喬教授、五島茂教授、高橋幸八郎教授等の氏名を引用するに止めよう。

先生の著作は日本語で書かれているが故に欧米学者に及ぼす影響はあり得ない。しかし先生の先駆者的研究が日本学者に及ぼした影響は計り知れぬものがあると思うが半世紀余の今日その学問的寄与は全く忘れられている。日本学界の通弊である仲間同志とのキャッチボールのお世辞の横行する社会では死後三十五年もたつ故人の学者に対するコンプリメントはなされない。しかし例外もある。早稲田大学の小松芳喬教授⁽¹²⁾は先生の産業革命史研究に対し「バイオニア・ワアク」として敬意を表明してくれた。

注

- (1) 「フランシス・ブレース伝」、『商学研究』一九二一年、本書第二部第二章收録。
- (2) Sir F. W. Eden, *The State of the Poor: or an history of the labouring classes in England from the conquest to the present period*, 1797.
- (3) 『産業革命史研究』大正十三年序文。本書第二部收録。
- (4) Paul Mantoux, *La révolution industrielle au XVIII^e siècle*, 1906. 同書は刊行後間もなく稀覯本となった。研究者の利用したのは二十二年後に出たその英訳本である⁽¹³⁾。The industrial revolution in the 18th century. An outline of the beginnings of the modern factory system in England. Trans. by Marjorie Vernon, Lond. 1928.
- (5) John Harold Clapham, *An economic history of modern Britain*, Vol. I. The early railway age. 1820-1850. Cambri-

age, 1926.

(6) T. S. Ashton, *The industrial revolution 1750-1830*. London, 1948.

中川敬一郎訳、『産業革命』昭和二十八年。

(7) 『イギリスの経済組織』昭和二十八年。

『産業革命』（共訳者井上幸治、遠藤輝明）昭和三十九年。

(8) 『英国自由貿易運動史』昭和十八年。

(9) 『経済学説の相対性』昭和二年。

(10) 『労働組合法の生成と変転』昭和四年。

(11) 『産業革命研究序説』昭和四十二年。

(12) 『英国産業革命史』昭和三十年改訂第二版、附録八頁。

三

産業革命史に関する研究の多産性は内外学者により幾つかのビブリオグラフィが出版されている一事によっても明白である。特に第二次大戦以降経済成長論が産業革命論と結びついて研究は複雑多岐となり統一の見解が得られなかった。六十年前にクラバムは「産業革命は三度も絞ったオレンジであるがまだまだ驚くべき程ジュースが残っている。」といった⁽¹⁾。このジュースを求めて多くの経済学者が半世紀余の間に多くの労作を発表したのである。しかしハートウェルはその近業においてその結果は不満足であるといった。その解釈によれば経済史家が一九六〇年において国際会議を持ち産業革命に関するシンポジウムを開いたが何等の統一的結論が得られなかったという⁽²⁾。

しかしハートウェルの産業革命の発生原因に関する分類は調法であるからその分類に従えば左の如くである。

第一、資本蓄積説。(カニンガム、アシュトン)。

第二、發明、イノーベーション説。(シュンペーター)⁽³⁾。

しかし機械と新技術のみが産業革命であるという狭い解釈をとらないで、広く農業及び工業の技術及び組織の変化(アシュレー)を注目すればそれは工場制度を意味することとなる。

第三、幸運なる要素の天恵(アシュトン)。

繊維工業における労力不足問題や鉄工業における燃料問題を解決する内在的要素の存在が産業革命の有力原因となった。

第四、自由放任(トインビー)。

ゼームス・ワットによる蒸気機関の發明とアダム・スミスの『国富論』による自由放任を基調とする合理主義の追及が産業革命となった。かくして「旧世界は破壊され新世界は建設された」という。

第五、市場の拡大(マントウ、ハモンド⁽⁴⁾、ノールス⁽⁵⁾)。

国内購買力の中心としての人口の増加と共に外国貿易及び信用の拡大がマントウにより主張せられ多くの追隨者を持った。

第六、ナポレオン戦争のイギリスに与えた利益、その他。

上田先生は産業革命の眞の意義は「産業の合理的経営」にありとして非常に広い解釈をとって居られる。産業革命の原因としてはハートウエルの分類の第二と第四をとった。即ち直接の原因として機械の發明を挙げ、イギリス木綿工業を中心としてその発明年表を手際よく述べられた。第二に間接の原因として合理主義を挙げて居られる。その語を引用すれば「間接の原因というのは十六世紀以来英国に醸生された所の思想上の潮流である。フランス・ペーコ

ンは十七世紀の始めに於いて、既に科学の力の無限なることを信じ、やがて人間は翼を生やして空を飛ぶようになる
と予言したこともあるが、兎に角此様に昔からの伝統的な習慣の束縛を脱して、物事を合理的に考へるという風が起
つて来た。……此点に就いて先づ学問上の説明を与へた人は経済学の創始者たるアダム・スミスである。」(7)。「合
理的経営の精神を実現する舞台は十九世紀の全体を通じ尚二十世紀の今日に至るまで絶えず拡張されつつあった。」
(7)。

先生の指摘する原因は二つにとどまらない。「大変動は一七七〇年から一八三〇年までの間に起つたのであるが其
時に至って鉄道及汽船が発達して交通機関の革命を惹起し、従つて商業及工業を益々大規模に赴かしめた。」「現代産
業を支配する所の大発明は従来歴史家の所謂産業革命時代後にも続々現れたのであつて、必ずしも前の時代に限つた
ことはない。故に一部の学者例えば近年の名著たるノールス女史の『十九世紀に於る工業及商業革命』などには十九
世紀後半の産業革命を詳説して居るが、之は確かに面白き観察である。」(8)。第一章だけを精読して見ても先生は
二分類のみならず幾多の要素を観察されている。唯大きく分類して二要素を重視されたのである。

産業革命の質的分類として最近の研究者は急変説と連続説を採用している。前説にはトインビー、ハモンド、ロス
トウ(9)を掲げ、後説にはクラッパム、アシュトンを利用するのが常である。先生はさきの引用文に示した如く産業
革命的变化は十九世紀後半にも起つたのであつて急変説ではない。旧師アシュレーが一九一四年に出版した
『英国経済組織論』は先生の久しきに亘りプロゼミナルのテキストとして使用された教科書であつて年々名解説を
講義された。同書においてアシュレーは「一七七六—一八三三年の変化は引続き将来に亘り一層大なる規模と一層大
なる速度を以て実行された。」(10)となしたのである。先生の先きの引用文と全く歩調を一にするのである。マーシャ
ルの「自然は飛躍しない。」*Natura non facit saltum* という格言は執筆に際し二人の頭脳にあったのであらう。

マルクス、エンゲルス、或はトインビー、ハモンドの主張した如く、産業革命により労働大衆の貧窮、窮乏は招来されたであろうか。先生はこれらの諸説にも反対である。「彼の社会主義者のいふ如く富者は益々富んで貧者は益々貧になるという事は歴史の否認する所であって、労働者の生活は産業革命の為に決して低下せずして却って向上して居るのである。仮ひ低下したことがあってもそれは過渡時代の一時的現象であったことは後に述べる所である。」(ii)とされる。

注

- (1) J. H. Clapham, The transference of the worsted industry from Norfolk to the West Riding. The Economic Journal, XX. (1910)
- (2) R. M. Hartwell, The Cause of the Industrial Revolution, An essay in Methodology. The Economic History Review, 2nd series, vol. XVIII, No. 1. (1965)
- (3) Schumpeter, The theory of economic development, Harvard, 1951.
- (4) Hammond, The rise of modern industry, 1925.
- (5) L. C. A. Knowles, The industrial and commercial revolution in Great Britain during the 19th century, 1924.
- (6) 『英国産業革命史論』第一章。本書第一部収録。
- (7) 『英国産業革命史論』第九章。本書第一部収録。
- (8) 『英国産業革命史論』第一章。本書第一部収録。
- (9) W. W. Rostow, The stages of economic growth, 1960. 邦訳に木村健康等『経済成長の諸段階』昭和三十六年があら。
- (10) W. J. Ashley, The economic organization of England. London, 1914, p. 141.
- (11) 『英国産業革命史論』第一章。本書第一部収録。

四

マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』やマルクスの『資本論』が資本主義社会の典型的形態としてイギリスを論評し、その必然的崩壊を説いたことは上田先生のしばしば指摘するところである。

しかし兩人のこの認識はイギリス産業革命の特殊性を無視した事によって諸国に対する普遍妥当的適用という誤謬を侵かしてしまった。

先生はイギリス産業革命の特殊性を指摘する(1)。

「当時の英国は第一に大戦争の悪影響を受けて居り、第二に英国特有の農業組織の変動に禍されて居り、第三に食料問題の行詰りに苦しんで居たので、当時の英国貧民の窮状を悉く産業革命に帰するのは正当の観察でない。従って又大工業の勃興する所、資本主義の発達する所には必ず此の如き極度の弊害を生ずると断定することも出来ないのである。而して産業革命の弊害といふ中にも唯過渡時代に起る所の弊害もあり、又資本主義の社会に固着した所の病弊もある、故に此等を区別して考へる必要がある。」先生は自説の裏付けとしてマーシャル(2)を引用し左の如くいわれる。

「マーシャル博士の近著『産業と貿易』には当時の状態を以て大部分産業革命以外の原因に帰し、且其内産業革命に帰因する部分も寧ろ一時的、過渡的であると論じてある。」

最近のイギリス産業革命史研究の動向に計量経済史的応用がある。国民所得統計を利用して微積分的分析が行われる。マクロ的研究を目標とするにも拘らず、数字の深淵に陥って論文の主旨何れにありやを見失わせるものが多い。先生の研究方法は当時利用すべき統計資料も鮮かったせいでもあるが、歴史の流れに現れる個々の経済や社会に対

し典型的人物の行動や思想を描き出して全体の色彩を明確にするにであった。そのために先生は若き時に読んだ幾つかの社会小説を行論中引用してドライなるべき経済史的分析に潤いを与えた。デイスレリの『シビル』(3)、ガスケル夫人の『メリー・バートン』(4)、キングスレーの『オルトン・ロック』(5)などが此の役に立っている。

先生に従へば「当時の経済学者や法律家が悉く自由主義者であったのに対照して当時の詩人小説家等は殆んど皆自由主義の反対者であった。サウゼー、スコット、コレリッジ、ディケンズ、カーライルは即ちそれである。此等の文豪の作品は文学上の産物としてのみでなく、政治上経済上の一思潮として研究を要するものだ」と余は考へて居る。」(6)。

十九世紀前半の思想混乱期において先生は社会主義を代表する人物としてロバート・オーウェンを、自由主義を代表する人物としてフランシス・ブレースを、温情主義を代表する人物としてシャフツベリー伯を撰んだ。この三人を対照とする事により産業革命期の社会動乱、労働運動、社会立法の幾つかのエピソードをパノラマ的に読者に描いたのである。現代産業革命史家によるパーセンテージ的経済分析よりも先生の筆の方が読者に人間行動の全貌を巧みに生き生きと伝えた。

また先生によれば十九世紀前半に、新興の実業家は得た富を以て土地を獲得しスクワイヤになった。これは先生が引用する所でないが、ナポレオン戦争により巨富を得た株式仲買人にして後に経済学者となったデビッド・リカードは友人ゼームス・ミルの勧告を入れてロットン・ボローを求めてその土地を地盤として下院議員になった。「兎に角商業の発達に因って生ずる新富豪と旧貴族との融合が、此の如き方法に依って出来たことは、英国の特色であつて仏国等の羨んだ所である。」(7)。

新実業家が旧貴族の社会的ランキングの中に入つて行つたのと同様に旧貴族の二男三男は外国貿易業界に入つて行

った。そして外国貿易業の社会的地位を高めたのである(8)。

学界より忘れられている先生の遺業を現代科学の水準より見るもまさに再読三読すべき名著であると思う。しかし何分にも半世紀余の昔の研究であるから研究史料不足の諸点もなしとしない。

先生はトインビーと共に木綿工業を産業革命の代表的産業として扱われている。勿論トインビー以降に出版されたチャブマン(9)、ダニエルス(10)、アンウィン(11)などを参照して木綿工業の分析は怠られないのであるが、その後マンチェスター大学などを中心として続々と新研究がなされた。

更に木綿工業史と関連の深い他業種における技術史の研究も為さねばならない。特に他業種として石炭業史、鉄鋼業史、化学工業史等の研究は必要であり今日は多くの優れた研究書に恵まれている。関連業種例えば「石炭と蒸気は産業革命を作らなかったが、産業革命に対して尋常ならざる発展と普及を許した。」(12)のである。

注

- (1) 『英国産業革命史論』第三章。本書第一部収録。
- (2) Alfred, *Industry and trade*. London, 1919. P. 74.
- (3) Disraeli, *Sybil*. 1845.
- (4) Mrs. Gaskell, *Mary Barton*, 1848.
- (5) Charles Kingsley, *Alton Locke*, 1850.
- (6) 『産業革命史研究』第三章。本書第二部収録。
- (7) 『英国産業革命史論』第二章。本書第一部収録。
- (8) David S. Landes, *Technological Change and development in Western Europe, 1750-1914*. *The Cambridge Economic History of Europe*, vol. VI. The Industrial Revolutions and after: Incomes, population and technological

change (1), Cambridge, 1966.

- (6) S. J. Chapman, *The Lancashire Cotton industry. A study in economic development.* Manchester, 1904.
- (10) G. W. Daniels, *The early cotton industry, with some unpublished letters of Samuel Crompton,* Manchester, 1920.
- (11) Unwin, Samuel Oldknow and the Arkwrights. *The industrial revolution at Stockport and Marple.* Manchester, 1924.
- (12) David S. Landes, *Op. Cite*, P. 329.

五

イギリス産業革命の研究はひいて日本のために必ず何かの暗示を与へると上田先生は信じた。「余は我國の青年が欧米の新思想を追ふと共に如何にして其新思想が發展し来りしかを考へて貰いたい。又此意味に於いて英國のみならず、仏・独・米・露並に日本自らの社会的及經濟的發達史が愈々盛に研究せられんことを切に希望して止ま」ないとされた⁽¹⁾。昭和二年の『企業と社会』に書かれた「日本の産業革命」(『新自由主義』昭和二年収録)は先生のこの試みであるがその要旨は昭和五年の左の一文によく要略されている。

「我國の産業革命は徳川時代からの自然の發展でなくして明治政府の指導の下に人為的に進行せしめられたものであり、西洋のそれを模倣したものであるから、英國に行はれた政策をそのまま取って我國に行ふことは勿論出来ないけれども、此研究が現に私に対して我國の時勢を觀測する上に有益なヒントを与へてくれているのである。私の觀測によれば日本の産業革命は明治維新によって其開始の条件を準備せられ、西南役以後熱心なる官僚政府の保護奨励の下に徐々に展開せられ、日清戦争後の三十年間に馬車馬的の進行を継続し、歐洲大戰の異常なる刺激によって全く成

長期に達した。」(2)と考へられた。

かように産業革命史は比較経済史的テーマとして先生の胸中にあつた。しかしその発想は第一次大戦から帰朝した先生の脳中に醸成したのであり、留学出発以前の先生の著作には遺憾ながら見出し得ない。

先生は甲種商業学校(現在の商業高等学校)の教科書を目的として、明治三十七年十二月『商業史教科書』(日本の部)を、明治三十八年十二月『商業史教科書』(外国の部)を著述した。前者については「本書著述に際しては和漢英独の書に亘りて聊か渉獵する所ありしも常に座右に置きて参照せしはドクトル福田徳三氏が独逸にて著はされたる『日本に於ける社会上及経済上の発達』(3)並に文学博士横井時冬氏の『日本商業史』(4)なり。本書の叙述にしても多少科学的なる点ありとせばそは福田先生の恵なるべく、又もし史料の精確なるを得たりとせばそは悉く横井先生の賜なるべし。」として母校の両先生に対して謝意を表明された。

対象になる若い読者を考慮して本書は簡易平明に執筆された。しかし書中問々卓見あり必ずしも両先生に盲従しない。例えば徳川時代を福田博士は警察国家と見たが上田先生は封建制度として観察した。また日本の企業家として明治の新教育を受けた実業家を注目し、会社組織が銀行、鉄道から海運、保険及び各種大工業に及ぶのを指摘された。

『商業史教科書』(外国の部)は明治三十八年九月までに「材料の蒐集を終り、直に執筆する計画なりしに、突然文部省より欧洲留学出発の命を拝し自ら此計画を実行すること能はざるに至れり」よって先生は友人の武田英一教授に材料を預けて執筆を乞うた。これが第一版の『商業史教科書』(外国の部)であつた。しかしその出来栄えは先生にとり不満であつたから「発刊後直ちに全部訂正に着手したれども当時余は欧洲留学中にして余暇に乏しく且屢々執筆を中絶するの止むを得ざる事情ありし為本年(明治四十二年)一月帰朝の時まで未だ脱稿に至らず。本年暑中休暇に至りて初めて再び筆を執りて以て此書を成せり」と改版本の緒言で述べた。

改版本は留学前における処女作である『外国貿易原論』（明治三十六年）に展開された商業史的知識の上に、留学中に研究した恩師アシュレーの著書、カニングガムの大著などが附加されて首尾一貫した明快な西洋経済史入門書となった。

「蒸汽機関の発明は現代の特色たる大規模の生産交通及び世界的貿易植民を喚起した一大原因であつて、実に産業革命 Industrial Revolution の発端である。世界の商業史を通観すると、蒸汽機関の発明は第十五世紀におけるアメリカ及び喜望峰航路の発見と相對する所の重大事件であると断ぜねばならぬ」(6)として産業革命という語が始めて出てくる。続いて第三章「商工業の組織」に第一節として「産業革命」を設けた。「生産及び交通に関する技術の革命と共に、産業組織も亦根本的の變化を來した第十八世紀以前には各国人民の大部分が農民であつて、その生活は主として自己の生産に依頼する状態であつたから、都鄙の分業はあつても、地方と地方との間に産物の交易を行うことは稀であり、況して國際間に商品の集散せられる數量は甚だ少かつたが、第十九世紀に至つて市場の範圍が著しく擴張せられ、内外の商業は非常に大規模になつた。……さうして商工業の經營の單位もこれに伴つて大きくなり、社会における商工業者の勢力は急に向上し、前期には土地を支配する所の貴族が一国を左右したのであるが、今は資本を支配する所の大商人、大工業家、大銀行家が最も勢力のある階級となつてきた」

さきにふれた如く先生は産業革命の原因として、直接の原因として機械の発明、間接の原因として合理主義を指摘したが、この時当年三十才の青年学徒は蒸汽機関の発明と商工業組織の拡大を原因として考察した。経済上の自由主義の影響も無視する訳でなく、別の箇所で「第十九世紀の改革は自由主義に基いての旧法（中世紀の）を廢止したため、農工商皆各個人の欲する方法により自由活発なる營業を行ひ、所謂自由競争によつて益々産業の進歩發達を來したのである。当時これ等の改革を行つた政治家の思想を指導したものは經濟学の始祖といはれるアダム・スミスの所

論であって、その名著『国富論』は学理上にも歴史上にも千歳不朽の地位を有するのである」(6)となされ、十四年後に出版される『英国産業革命史論』とその分析において一脈の相通するものがあつた。

注

- (1) 『英国産業革命史論』大正十二年版序文。本書第一部収録。
- (2) 『産業革命史』昭和五年版序文。本書第二部収録。
- (3) Tokuzo Fukuda, Die gesellschaftliche und wirtschaftliche Entwicklung in Japan. Stuttgart, 1900.
- (4) 横井時冬『日本商業史』明治三十一年。
- (5) 横井時冬『日本商業史』(維新後の部) 明治三十三年。
- (6) 『改訂近世商業史教科書』(外国の部) 第二期第二章、昭和八年。本書第三部収録。
- (6) 同上、第二期第一章。本書第三部収録。

六

上田先生は『英国産業革命史論』を上梓した直後の大正十二年五月に全国調査機関連合会で「明治経済史の研究」と題して講演をした。そのなかで「明治経済史の研究」といふことは「実は私がこれから段々やつて行かうと思ふこととで、これについては何れ皆さまの御援助を受けなければならぬといふ考へから、兎に角斯ういふ問題がある。これは非常に肝腎なことぢやあるまいかといふ事を皆さまに申し上げて御賛成を得て置きたいといふ考へであります。」(1)と述べた。

明治経済史に関しては先生は謙遜してこれから研究をスタートするといふが既に研究の素地があつた。『上田日記』

を見れば解るごとく、旅行好きな先生は世界及び日本各地の名所旧蹟のみでなく、経営学のパイオニアらしく各地の産業を調査し工場、商店を見学してノートを作っている。私の今記憶に浮ぶだけでも、ゼミナールの学生として井上潔さんは日本紡績業を勉強し、橋本音次郎さんは報徳社を卒業論文のテーマとした。緒方清君は協同組合に関する研究をしこれに先生も加筆されて学術雑誌に発表された⁽²⁾。御自身も大正十二年に「日本における株式会社の起源」と題しその史論のなかで特別な席を与えていられる土族の商法活動の一として国立銀行の盛衰を丹念に研究された⁽³⁾。この講演においても土族の商法に関して屢々言及され「明治以降産業上の発達、経済上の発達というものは土族に負ふところが非常に多い」とされる。また講演中屢々興味深く比較経済史的説明を与えられた。いわく「明治の維新といふものが単に封建制度を打破したといふだけでなくて、欧羅巴の新しい技術を盛んに輸入した。この新しい技術を輸入することによって日本の生産力が急激に増加した。欧羅巴の歴史に言ふ所の所謂産業革命であります。但し西洋では十八世紀の終りに蒸汽機関その外の機関が発明される前に可なり町人の経済上の実力が進んで来て居ったのでありますが、日本ではさういふ所まで町人階級が進まない中に欧羅巴の進んだ技術を輸入して来て、これを実際に行ったのでありますから、生産力の能率の上り方といふものは非常に激しかった。短かい間に生産力が急に上ったといふ事実があるのであります。」「紡績は現今、日本の諸工業の中では一番独立したものであります。是も始めは政府で機械を外国へ注文をして会社に貸してやるとか、政府が洋行させた技師を会社へやったといふやうな訳であります。その外紙を製造することでも、船を製造するのでも、鉄でも銅でも石炭でも総て政府の世話にならぬものはない。是は単に政府の保護とか奨励とかいふことだけではありません。即ち自然に出来たものを保護したり奨励したのではない。出来ない物を政府の発意でやらせたのです。ですから若し是を自由競争というやうな事に任せて置いたならば日本には今日見る程の大きな工業は起らなかったと判断されるのであります。然らばこのやうに非常な力

のある政府、これは謂はば賢明なる専制者である。人民の意志を尊重してやるのではなくして、上から押付けてやらせるのであるが善いことをやらせたのだから之を賢明なる専制主義と呼ばねばならぬ。然らば斯の如き専制者が一体何処から出て来たのであるかと考へて見ますと、つまり武士であります」「斯の如き状態はこれを歐羅巴の歴史に引当てて申しますれば、英國でいへばエリザベス時代、仏國でいへばルイ十四世の時代、即ち経済学の方から申しますればマーカントイルシステムの時代が是に当るのであります。」と。

明治経済史の研究はその翌年も続けられ長文の研究論文が先生により執筆された。今は、複製本があるから特に珍らしくないが当時稀覯本であつた農商務省編前田正名執筆『興業意見』明治十七年和装活版刷三十冊本の批評及び紹介が為された。論文の第一頁に日本産業革命に関して明快な比較経済史の見解が吐露された。いわく「明治維新以後現今に至る日本の経済状態は産業革命の時代たると同時に重商主義の時代なりき。此間に日本国民が十八世紀の新発明を採用し大企業組織を發展せしめたる点より見れば之を産業革命の時代といふこと固より不可なけれども、此産業革命を以て英國の産業革命に比するときは兩者の間に著大なる差異の存在することを感ぜざる能はず。何となれば英國に於ける一七六〇年乃至一八三〇年の産業革命は其以前に養はれたる民間実業界の財力智力の成熟したる結果にして経済思想上には自由主義が發達し、アダム・スミスの自由競争の理想が漸く實際政策上に勢力を獲つつありし時代なれども、明治の日本に於いては自由主義の勢力は極めて微弱にして其所謂産業革命の真相は実に政府の先導の下に為されたる国民的改革に外ならず。即ち無意識に來りたる自然の發達にあらずして一部政治家の決心努力に依りて其端緒を開きたるものなり、而して此時に當りて日本の実業家即ち町人階級は未だ自力を以て欧米の新文明を移植する程度に達せざりしかば偏に政府の保護奨励に依頼せざるを得ず。かくして三百諸侯の下に分割せられたる国民経済は統一せられ又此統一に必要な資本主義の精神は養成せられたり。是正に十六、七世紀に於ける英仏の重商主義と

其軌を一にするなり。」(4)。同論文は明治十七年前後に至り明治重商主義政府が政治上の反動期に入ると共に産業上にも所謂「検束の法」によって中小企業を中心として秩序恢復の業に着手したことを指摘した。

その後先生には明治経済史の研究はほとんどない。大正十五年四月から昭和三年三月まで二年間個人雑誌『企業と社会』の主幹として繁忙を極め、また昭和二年の国際経済会議、昭和八年の太平洋会議に出席するなど身辺多忙であり且大学の内外における空気も異常であつたので研究中断を免れなかった。しかし昭和七年頃より銀座の貿易会館内に日本経済研究会を設置し、有力なる協力者小田橋貞寿君等を身近に得て日本人口の将来を静思し、その推算をなされた。先生の編輯した三冊の単行本は此の間の収穫である(5)。先生は日本人口は昭和三十年に八、一一四万人そしてその後も若干増加するけれども、八、〇〇〇万台を最高として停止するのであらうと予測されたが、実際は昭和二十三年にその数字を実現してしまつた。日本の一人口学者は上田先生の数字が当らなかつたと批評するのであるが(6)、何人が第二次大戦のかかる姿における実現を予測したか、特に海外よりの六百万を越す引揚者を予測し得たであらうか(7)。

注

- (1) 全国経済調査機関連合会『財政経済問題講演集』大正十二年五月所載。本書第四部収録。
- (2) 『群馬県生絲販売組合の研究』『国民経済雑誌』第二十五卷第四号、大正七年。
- (3) 『日本に於ける株式会社の起源』『商学研究』第二卷第三号、大正十二年。『上田貞次郎全集』第二卷、四五七頁以下収録。
- (4) 『明治十七年の産業政策』『国民経済雑誌』第三十六卷第四号、大正十三年四月掲載。本書第四部収録。
- (5) 『日本人口問題研究』第一輯、昭和八年。第二輯、昭和九年。第三輯、昭和十二年。

(6) 南亮三郎『日本人口と経済』昭和四十七年。

(7) 猪谷善一「南人口学の評価」(南博士祝賀論文集刊行委員会編『人口と経済と社会』昭和四十八年収録)。

七

イギリス産業革命の時期的区分については、上田先生は一七六〇年乃至一八三〇年の七〇年間をとっておられる。しかしこの七〇年間に急変があったとするトインビー、ハモンド、ロストウ流の狭い見解ではなくて、電信、電話、電動力は十九世紀の終に属する発明であり、即ち現代産業を支配する所の大発明は従来歴史家の所謂産業革命時代後にも現れた。故にノールス女史と共に十九世紀の産業革命をも含めて観察されているのである。但しクラッパムと共に「一八二〇年より一八五〇年のイギリス産業の概観はスロー・モーションの一研究」であるという見解に同調されたかどうかは不明であるが、何れにしても急変説ではなくて、連続説をとっておられた。

日本の産業革命については今から四十五年前の昭和五年において「日本の産業革命は明治維新によって其開始の条件を準備せられ、西南役以後熱心なる官僚政府の保護奨励の下に徐々に展開せられ、日清戦争後の三十年間に馬車馬的の進行を継続し、歐洲大戦の異常なる刺激によって全く成長期に達した。」(1)とせられたことはさきにも引用した所であり、明治十年(1877)から歐洲第一次大戦の終結の歳である大正七年(1918)を執るならば三十一年間が日本産業革命の区間となる。これに對し最近の日本の研究者は甚だ短い期間をとりいわばイギリス産業革命史家のいう急変説に近いものがある。山田盛太郎氏及びこれに同調する大石嘉一郎教授は「明治三十年乃至四十年頃」説をとり(2)、大内力教授は「明治三十年代初頭」説をとり(3)、古島敏雄教授は「大正初期」をとり(4)、堀江保蔵教授は「明

治十九年乃至明治四十年」説をとる⁽⁵⁾。かく説の分岐するのは何を区分の基準とするかにより、また統計のとり方により異ってくるからであってこの問題は今後も引続き研究さるべき重要課題である。

英国産業革命史を先駆者としてやり出した先生が日本研究の比較経済史として始められたことは既にふれた所であるが、更にそれよりも深い明治の国士的愛国の至情が発してこの卓抜なる研究を産んだといえよう。その語を借れば「安価なる社会改造論の流行し又忽ちにして消滅する時代には歴史の研究及其研究の結果を普及せしむることが必要である。」「アシュレーの *Economic Organization* を読んで時代思潮と実世間との交渉を明かにした手際に敬服した。」

上田先生はその遺稿に日英産業革命史に関する多くのブック・レビューを残した。グラハム・ワラス著『フランシス・ブレース伝』や農商務省編『興業意見』の如きは長編の研究論文であり、いわばレビュー・エッセーともいうべきである。その他沢山の産業革命史関係のブック・レビューがある。嘗って先生は小泉信三博士を評して「著者は多くの書物の中から最も力のある片言隻語を捕へ来って自家薬籠中のものとする一種の手腕を具へた人だ。」と為されたが、其の語はそのまま上田先生にもあてはまるものであって、先生のブック・レビューは全体の骨格を巧みに示しかつ読者に清涼の読後感を与えるのであって、上田先生の巨手は真に敬重すべきものがあつた。

注

- (1) 『産業革命史』昭和五年改造社本、序文。本書第二部収録。
 - (2) 山田盛太郎『日本資本主義分析』昭和九年。
- 大石嘉一郎編『日本産業革命の研究』上、昭和五十年。

- (3) 大内力『日本経済論』昭和三十七年。
- (4) 古島敏雄『資本制生産発展と地主制』昭和三十八年。
- (5) 堀江保蔵「日本の産業革命」『日本人口学会会報』昭和四十六年度、五六頁以下。

一九七五年八月二十日稿了

西軽井沢の山荘にて

猪 谷 善

昭和五十一年一月三〇日発行

上田貞次郎全集 第三卷 産業革命 〈非市販品〉

著作権者 上田正一

編集委員代表 猪谷善一

” 山中篤太郎

” 小田橋貞寿

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ一〇一 如水会館内

上田貞次郎全集刊行会 発行

代表 猪谷善一／茂木啓三郎／上田正一

東京都文京区大塚三ノ五ノ四 〈電話 東京 八九四三／四九八一〉

〈製作担当〉 株式会社 第三出版

■三五周年記念出版

上田 貞次郎全集

〈全七巻〉

編集委員代表 猪谷 善一／山中 篤太郎／小田橋 貞寿

* 既 刊

* 第1巻	経営経済学	〈解説〉末松 玄六
* 第2巻	株式会社経済論	〈解説〉青葉 翰於
* 第3巻	産業革命	〈解説〉猪谷 善一
* 第4巻	社会改造と企業	〈解説〉松尾 弘／太田英二
* 第5巻	貿易関税問題	〈解説〉大泉 行雄
〈統刊〉第6巻	日本人口論	〈解説〉小田橋 貞寿
〈統刊〉第7巻	新自由主義	〈解説〉山中 篤太郎

■体裁 菊判クロス装特製箱入 〈550～700ページ〉